

第二節 各種掃海具ノ發達

第一項 小掃海具(端艇掃海具)

本掃海具ノ嚆矢ハ明治十一年軍艦扶桑英國ヨリ回航ニ際シ搭載シ來リシモノニシテ傭教師「ゼー、パール」ヨリ其ノ使用法ヲ教授セラレタルニ在リ爾後明治三十七年特別掃海索ノ制定ヲ見ルニ至ル迄ノ唯一ノ掃海兵器(専ラ有線水雷破壞用ノ探海錨ニ就テハ別記ス)タリシモノニシテ機械水雷、電氣觸發水雷及浮標水雷ヲ攪捉シテ之ヲ自發セシメ或ハ掃海裝藥ヲ發火シ破壞セシムルニ在リ但シ主目標ハ敵ノ妨害ヲ期待セザル機械水雷ノ破壞ニアリキ當時ニ於ケル本掃海具ノ構成要目等次ノ如シ

掃海索長 一二〇呎 距離線 所要通航艦船ノ最深吃水ヲ少過スル長サ

裝 藥 掃海索ノ兩端ニ綿火藥一六斤ノ錫罐ヲ裝着ス

(備考)當時掃海具ハ此ノ種ノ一ニ止マリシモ所要掃海面長大ニシテ且急速ヲ要スル場合ハ水雷砲艦ノ保護ヲ受クルニ隻ノ砲艦ヲシテ鐵鎖ヲ曳行セシメ其ノ風曲部ニヨリ水雷ノ位置ヲ發見シ掃海艇(前型)ヲシテ之ヲ破壞セシムル方法ヲ規定セルモノアリ

本掃海具ハ爾後三十七年十月常備艦隊ニテ其ノ呼稱ヲ通常掃海索ト改定シ尙其ノ構成ノ一部ヲ改メ其

ノ用途等ヲ次ノ如ク指定セリ

一、通常掃海索ハ主トシテ敷設水雷ヲ爆發スルニ用フ

二、通常掃海索ハ「カツター」又ハ小蒸氣艇ニテ使用ス

三、通常掃海索ハ成ルベク潮流ニ従フテ之ヲ用フベシ

四、浮標ノ浮量及球形錘ハ之ヲ用フル場合ノ潮流等ニ準ジ臨時増減ス

本掃海具ハ三十七、八年戦役及日獨戦役ノ經驗ヲ經テ概ネ其ノ用途ニ適セルヲ認メラレシガ敷設水雷調査委員會ノ進言ニ依リ大正五年更ニ一部ヲ改善シ之ヲ小掃海具ト改稱セリ改善要領左ノ如シ

一、掃海尾索ヲ 曳索ト改稱シ周五十一耗「マニラ」索トス

二、水面尾索ヲ 水面曳索ト改稱ス

三、深度索ヲ 周一二、五耗ノ「マニラ」索トス

四、浮標ヲ 三個共同型トス浮量約二二盃塗色左右白、中央赤

要目ノ詳細及能力等ハ參考圖表ニ見ルガ如クニシテ現用(昭和四年)制式小掃海具即チ之ナリ
本制式採定後二、三ノ改良案アリ主要ナルモノ左ノ如シ

一、大正八年十二月技術本部考案水雷學校實驗

從來ノ小掃海具ハ深度索ノ長サ短ク且水面索水面尾索ハ取扱上不便ナリトノ意見多カリシニヨリ深度索長ヲ二〇米トシ水面索水面曳索ヲ廢シ實驗ノ結果機雷拘捉後陸用電線ニ沿フテ繫維索ノ滑リ甚ダ惡シク且該線ヲ毀損スル憂アルヲ以テ裝藥ヲ掃海索ノ一端ニ移ステ可トシ其ノ結果中央浮標ヲ省略スルモ何等支障ヲ認メズ然レドモ尙掃海艇ノ安全等ヲモ顧慮スル必要アリ

二、大正九年七月水雷學校實驗案

機雷ヲ掃海索中央ニテ拘捉セル場合其ノ兩側掃海索端ヲ離脱セシメ毎機雷ニ依ル損廢ヲ防止セントスルモノニシテ十數回實驗ノ結果斷離鉤ノ作動不充ナルヲ認メタリ

三、大正十一年吳防備隊改良案

大正九年ヨリ同十一年ニ亘リ吳防備隊ニテ制式小掃海具ニ就キ二號機雷ニ對スル處分能力ヲ實驗セシ結果機雷八個ノ内處分(共燃)シ得タルモノ一個ニ過ギズ他ハ殆ド小掃海具裝藥ノ發火ニ堪ヘタル狀況ナリシテ以テ改良型小掃海具ヲ考案實驗セリ考案要領ハ制式要具ニテハ裝藥ヲ機雷罐ニ密着セシムルノ困難アリトシ掃海索ノ一端ニ拘捉器ヲ設ケ拘捉機雷ヲ該拘捉器器内ノ把持器ニ把持セシメ機雷ノ移動ヲ防ギ以テ裝藥ヲシテ機雷罐ニ密接發火セシムトスルニ在リテ左記利點ヲ擧示セリ

- (一) 拘捉器ノ作動ハ確實ナリ
- (二) 機雷ノ接着狀況良好ナリ
- (三) 制式ノモノニ比シ作業容易ナリ
- (四) 把持器ノミノ消耗ニ止マルヲ以テ經濟的ナリ